

宿縁

十一月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号
浄土真宗
本願寺派
中原寺
TEL 〇四七―三七二―〇二九二
FAX 〇四七―三七二―〇二六二

分け隔てなき心に 生きる



秋晴れの日、ある駐車場の車内から外を眺めていたら赤い帽子をかぶった園児たちが先生に連れられて道路を歩いている光景が目に見え、目を凝らして見ると、幼い児童は先生の曳く動車に乗って、歩ける子たちは列をなして何とも穏やかな微笑ましい姿です。

それを見る暇の裏には、同じ小さな地球の場で同時に何も知らない罪なき子どもたちが殺され傷つき戦火におびえている姿です。このむごい状態を作り出しているのは間違いなく大人たちです。大人とはなんと罪深

い存在なのでしょうか。
ウクライナでそしてパレスチナ自治区でまたその他の地域でも、なぜこれだけ人は殺し合わなければならぬのでしょうか。またその紛争の多くは宗教が根っこにあることを知ればやりきれなさで一杯です。

本来、人間の過ちに目覚めさせる宗教でなければならぬのに、自らを問うことなくして他を攻め否定していくのであれば、それは宗教とも信仰とも程遠いものと言わざるを得ません。

そこでいま私たちはそのことを仏教に問い、親鸞さまの教えに尋ねてみなければなりません。

二千五百年ほど前、この地上において真理(真実)に目覚められ仏陀となられたお釈迦さまは人間の苦しみ迷いはどこから来るのかを探求しそして気づかれました。それはあくまでも自分中心でしか見られない、そしてそれに固執するあり方にあると覚られました。

また、誰もが恐れる暴力について、真理のことは(ダンマパダ)第十章で、「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死を恐れる。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ。」とあります。お釈迦さまの時代も部族や国々が争いを起こし殺戮が繰り返されていたのです。

それでは親鸞聖人の生きられた時代はど

うだったのでしょうか。
「平氏にあらざんば人にあらざ」と権勢を誇った平家を倒した源氏も兄弟を殺戮し、やがてまたおのれの子も近親に殺されていく悲劇につながってまいります。

明治維新も太平洋戦争もこれが悪い彼が憎いと自らの正体の過ちに気づくことなく、他を廃して善だ悪だと我中心を貫こうとする恐ろしい悪性が繰り返されています。

親鸞聖人はこうした周囲の事実を他人の世界と見たのではなく、あくまでも自分もそうだと己の身を悲しんだのです。

多くの人が知る歎異抄(たんにしよう)の第十三章には人のなす行為について「業縁(ごうえん)」ということを述べられています。「業」とは身体、言葉、心に起こる行為です。「縁」とは間接的な条件です。親鸞さまはあるとき、門弟の唯円(ゆいえん)に次のように尋ねます。

(親鸞)唯円よ、お浄土に往生するための条件に人を千人殺してくれないか。そうすれば往生は確かなものになるであろう。

(唯円)せつかくの師のお言葉ですが、私のようなものには一人として殺すことなどできません。

(親鸞)それではどうして、先ほどの親鸞のいうことには背かないなどといったのか？

これでわかるであろう。どんなことでも自分の思い通りになるのなら、浄土に往生するために千人の人を殺せとわたしがいったときには、すぐに殺すことができるはずだ。けれども、思い

通りに殺すことができる縁(間接条件)がないから、一人も殺さないだけなのである。自分の心が善いから殺さないわけではない。また、殺すつもりがなくても、百人あるいは千人の人を殺すこともあるだろう。

ここところは前後の文章の脈絡を省いていますので難しく正確に伝わらないところだと思えますが、人間の蓄えた知識による善悪やものの判断の危うさ不確実さを指摘している大切なところなのです。

親鸞聖人は、阿弥陀如来の真のこころ、つまりあらゆる人を平等に見、そして救わずにおかないという絶対的真理に立脚した眼差しを信受したのです。それはまた人間の知恵の限界、いや過ちに気づかされたのです。

日頃読みなれている『正信偈』の御文には「邪見驕慢悪衆生(じゃけんきょうまんあくしゅじょう)」とありますね。「邪見」とは誤った考えのことであり、「驕慢」とは自らの才能、地位などに対して執着し、他人に対しておごりたかぶることです。

世間に生きる私たちの生き方は知恵の向上心です。それこそが人間が他の生き物と比べた優位性だと思っています。しかし他の生き物は、求めるものが容易に得られない場合に苦しむのですが、人間の苦しみは、自らの欲望そのものが、苦しみの震源地になっているといえましょう。

親鸞さまは果てしなく迷い続けなければならぬであろうわが身が、世間を超えた仏の教えに今遇い得た、聞きがたき教えをすでに聞くことができたことに慶喜されました。それは新たないのちへの誕生なのでした。

【寺灯雑記】

○若松先生の言葉に参加者聞き入る
10/21

今年で三十三回目となる中原寺文化講演会が山崎製パン企業年金会館にて開催され、多くの方にご参加いただきました

今回のご講師は、多くの著書もあり、テレビなどのメディアにても活躍されている若松英輔先生をお迎えしました。「信じる」と知ること」というテーマで、「知識の積み上げのうえに信の領域があるわけではない」ということや、すべてのものは変わりゆくなかで自分も他者との関係も変わりうるものであることなど、お話しくださいました。

また、質疑応答の時間では、参加者からの質問に対して、分かりやすく、かつ真摯にお答えくださっている姿が印象的でした。



○皆さまからのアンケートより

*深く考えさせられる内容で、今までの講演の中で一番心にしみる、印象に残るものでした。最高でした。個人的に先生とお話ししたいとせつに感じました。先生の本をたくさん読んでみます。

*秋の夜長、若松先生の著作をじっくり読んでみたくなりました。言葉ひとつひとつに意味のあることを考えながら。

*「信じる」ことについて、あらためて深く考えるきっかけになりました。何度も何度も語りかけて下さることが、先生が私たちに信じて下さっているからではないかと感じました。

*本日はいつもご著書やテレビで拝見している若松先生のお姿に接することが出来、夢のようでした。初めてお参りした築地本願寺で、たまたま手に取ったチラシに感謝です。予約もなく、駅近で、今時こんなラッキーな講演会があるとは信じられませんでした。心より感謝申し上げます。

*私は五年前に夫をがんて亡くした時、若松先生の本にどれ程なぐさめられたいやされたか解かりません。先生のコトバはとてもやさしくあたたいもので、先生のお話が聞きたくて本を何冊も買い、テレビも若松先生が出るのはすべて見るようになっています。いつまでもお元気で私たちを救ってください。

*本日はとても興味深いご講演にお招きいただきまして誠に有難うございました。何事も頭で考えがちですが、何を信じるべきか、を考えさせられるお話でした。自分の人生のため、自分を救い出すため

に、大切な言葉を書き留めておきなさいというアドバイスは印象に残りました。書物だけではなくていいとのこと。ありがとうございます。レジュメは大切に保存いたします。
*貴重な講演会を有難うございました。今月会場一階で本講演会のチラシを見つけ、講題に興味をもって来場しました。お話を聞いてとても良かったです。本当に。ここでの出会いもかけがえのないものでした。開催していただき誠に有難うございます。

*今回、初めて参加させて頂き本当に有意義な時間を過ごすことが出来ました。「人を信じる事の意味、大切さ」また、色々な物事を知ること(過去、未来を含めて)も必要である事、改めて自分をこれから見つめなおし、前向きに残りの人生を過ごして行けたらと思っております。

*汲み尽くせない言葉の数々を今後、幾度となく反芻して、理解に努めたいと思えました。本当に感動しました。

*昨年末、自分にとって最愛の息子を二十六歳で亡くしました。「知識を積み上げた先に信心が生まれるものではない」との言葉、胸に沁みました。阿弥陀さまとの向き合い方をいま一度考え直したいと思えます。今日の講演本当にありがとうございました。

【法要・法座・行事のご案内】

○お仏具磨き・清掃奉仕

※十一月四日(土) 十時

莊嚴仏具のお磨き、境内、庫裏、会館等の清掃作業をしていただきます。お手伝いくださる方はお願いいたします。お昼を用意してあります。

○婦人会・壮年会合同法座

※十一月四日(土) 一時半

御文章(四帖第十五通)の解説と話し合い。

○子育てサロン

※十一月十三日(月) 十一時～二時

◎報恩講法要修行

※速夜法要

十一月二十日(月) 一時～三時

*お勤め 初夜礼讃

*御伝鈔拝読

*法話 住職、前住職

※日中法要(ご満座法要)

十一月二十一日(火) 一時～三時

*お勤め 正信念仏偈

*法話 武蔵野大学名誉教授

法善寺前住職 山崎龍明師

講題 親鸞聖人のお誕生と「教え」

— 深さ、広さ、明るさ—

☆親鸞さまのご恩に報謝するこの仏事は、日頃の門徒としての姿勢が問われるものです。ご参詣ください。

法要の開始時間が変更されました。

ご注意ください。

○浄土文類聚鈔を学ぶ(親鸞セミナー)

※十一月二十五日(土) 二時 前住職

【今月の掲示板のことば】

聖(きよ)い戦争とか

正しい暴力ってありますか